

## 4

## 特集1 首の美容

# 家庭での首の美容 —化粧品、家庭用美容機器—

## 尾見徳弥

クイーンズスクエアメディカルセンター皮膚科 部長

顔に対する美容施術は非常にニーズが高く、数多く実施されており、効果も得やすい。それに比べて、首(頸部)は部位的な問題から顔に比べて気にすることが少なく、費用をかけて美容施術をしても満足度が低いこともあり、あまり実施されていない。しかし、首は紫外線の影響は受けにくい、加齢によって横のシワができやすくなり、皮膚のたるみも目立ちやすい特徴がある。近年、「アンチエイジング」や「美白」に有効な機能性化粧品の有効性も認識されており、消費者のニーズも高い。本稿では消費者が手軽に行える化粧品や家庭用美容機器を用いた首の美容について述べる。

## はじめに

首は紫外線の影響は受けにくい、加齢によって横のシワができやすくなり、皮膚のたるみも目立ちやすい特徴がある。また、30代からはスキントッグといわれる小丘疹が多発することが多く、顔とは違い化粧で隠しにくい、首もとの加齢は目立ちやすい。

1990年代からの美容施術の発展は著しいものがあり、とくに顔面においてはケミカルピーリング、レーザー、intense pulsed light (IPL)、高周波 (radio frequency ; RF)、高密度焦点式超音波 (high intensity focused

ultrasound; HIFU) などさまざまな手法の施術が実施され、効果を上げている<sup>1)</sup>。顔面の美容施術を施術後、顔面の改善に比べて「首」の加齢が気になるということで首の美容を希望され、顔に対する美容施術をそのまま首に対して実施する例も多い。とくにスキントッグに対しては炭酸ガスレーザーによる焼却が効果的である。

しかし、顔面と首の美容施術を医療機関で同時に実施した場合、料金もほぼ倍近くかかり患者負担も増加する。そのため、より低コストで済む化粧品や家庭用美容機器での施術を希望されることも多い。本稿では医療行為ではないが、これらに対する知識の整理も含め、現状について述べていきたい。

表1 植物性抗酸化剤

原料	皮膚生理への効果	その他
大豆	エストロゲン作用を有するフラボノイド抗酸化物質	皮膚の厚さの改善
クルクミン	ポリフェノールの酸化防止作用。天然防腐剤として使用	外用時に刺激感を感じることもある
緑茶	ポリフェノールの酸化防止作用	新しく煎れられたもの、または素早く褐色に酸化させるBHTで安定化されたもの
シリマリン	フラボノイドの抗酸化作用	光感受性のあるヒトで局所的使用により有効
ルテインおよびリコペン	カロチノイドの抗酸化作用	新鮮な熟したトマトの摂取で有効
ロスマリン酸	ポリフェノールの酸化防止作用	新鮮なローズマリーの葉に高濃度で存在
ヒペリシン (セントジョーンズ麦芽)	ポリフェノールの酸化防止作用	経口で大量に摂取してはならない
エラグ酸	ポリフェノールの酸化防止作用	経口または外用での抗酸化作用を有すると考えられる

BHT: ジブチルヒドロキソトルエン

表2 ビタミン系抗酸化剤

原料	皮膚生理への効果	その他
ビタミンE	$\alpha$ トコフェロール: 皮膚での抗酸化作用を有する	細胞膜脂質の酸化を防ぐ第一段階の物質、局所への浸透はほとんどない
ビタミンC	L-アスコルビン酸: 皮膚での抗酸化作用を有する	細胞膜脂質を保護するためにビタミンEを活性化状態にする。表皮より深層への浸透はない
ナイアシンアミド	タンパク質の糖化を減少させて機能する	被刺激性
$\alpha$ リポ酸	抗酸化剤	真のビタミンではなく、ミトコンドリアで合成
ユビキノ	抗酸化剤	真のビタミンではなく、ビタミンEを再生
イデベノン	抗酸化剤	ユビキノより強力な抗酸化作用を持つ新しい原料
レチノール	ビタミンA: 抗酸化剤	1%を超える濃度では皮膚への刺激性が高い。活性化には物質の安定が重要
プロピオン酸レチニル	ビタミンAエステル: 抗酸化剤	他のビタミンA誘導体の局所使用に比べて刺激性が低い
パルミチン酸レチニル	ビタミンA誘導体: 抗酸化剤	生物的活性は弱く、時に製品に対する抗酸化剤として使用

機能性化粧品<sup>2)</sup>

## 機能性化粧品とは?

2010年代より、「アンチエイジング」や「美白」を目指すスキンケア化粧品のヒットが相次ぎ、エイジングケアや美白効果を特徴とする機能性化粧品市場が伸びている。しかし、いわゆる化粧品といわれるものは、医薬品医療機器等法(以下、医機法)では「化粧品」と「医薬部外品」が規定されているのみであり、「機能性化粧品」という分類はない。

機能性化粧品は、医薬部外品に分類されるように思われるが、法律的にはあいまいである。たとえば美白成分が含まれている場合、医薬部外品ならば、メラニンの生成を抑え、シミ・そばかすを防ぐといった表現をすることが認められている。しかし、化粧品では美白表現である「美白効果」「ホワイトニング効果」を表現することはできず、メー

キャップ効果により肌を白くみせる旨の表現のみで、具体的には「塗ればお肌がほんのり白く見える美白ファンデーションです」や「シミ、ソバカスをきれいに隠し、お肌を白くみせてくれます」といった表現しかできない。ところが、ハイドロキノンといった美白効果のある成分を含んだ製品が「化粧品」として大手化粧品会社からも販売されている。

このように法的にあいまいな機能性化粧品ではあるが、首の美容に関連する「抗シワ」と「美白」についてみていきたい。

抗シワ機能性製剤<sup>2)</sup>

抗シワを目的とした原料成分は植物性の抗酸化剤(表1)、ビタミン系の抗酸化剤(表2)、細胞調整因子(表3)である。これらの成分をみて気がつくことは、ほとんどの成分が保湿効果を有することである。すなわち保湿成分は大部分の場合、機能性成分と分けられず抗シワ機能性成分の大部分を占めている。